

# ロゴスと「名」

今 泉 晴 行

Λ Γ Ο Σ et le nom

IMAIZUMI, Haruyuki

## 初めに

わたしたちは「名」を、どのように受容しているのだろうか？ 自己の「名」を、他者の「名」を、そして、《ことば》にならないことを。わたしたちは「名」を、ある事物を他の事物と識別するためだけの単なる符丁とは思ってはいない。しかし、だからといって唯一無二のかけがえのなさを顕示するものとする人は少ない。

ひとが、事物に「名」づける折りには、その存在の出生、生起時の状況、そして名づける者の想い、希(ねが)いをこめる。そして「名」の変更も含め、新しい状態の出来を示す。

また、ひとはあまりにも大切な《こと》に対しては、その「名」を口にすることも憚られることがある。大切だからこそ、その「名」を呼べないこともある。いづれにしても、その《こと》の切要さを、その「名」はあらわす。

しかし、かけがえのなさは、その《こと》の唯一無二性を示し、他者との峻別をあらわすものである。だがある意味で、それは区別であり、《ことば》で言い表すことで、ひとつの《こと》を切り分けしてしまうことかもしれない。

その背反する「名」の両面を少し考えていきたいと思う。

また、ひとは自己の理解、想像を超える《こと》に邂逅して、《ことば》を失う。ひとは沈黙せざるを得ないこともある。その事象、事物にも触れていきたいと思う。

## ．現象的事物の「名」

### 1．旧約文献・創世記における「名」

1) まづ創世記の天地創造逸話において、「名」という言辭は用いられてはいないが、その呼称の由来を如実に物語る記述がみられる。

「主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に息を吹き入れられた。ひとはこうして生きる者となった。(創世記 2,7)」

また、その記述の後にある、男と女という語の謂れも同様である。

「主なる神ヤーヴェは、そこでひとを深い眠りに落とされた。ひとが眠り込むと

そのあばら骨のひとつを取り、その後を肉でふさがれた。そして、主なる神は、ひとから抜き取ったあばら骨でひとりの女を創り上げ、ひとのところに連れてこられた。するとひとは言った。

『これこそ、わたしの骨の骨、  
わたしの肉の肉  
これをこそ女(イシャー)と呼ぼう。

まさに男(イシュ)から取られたものだから。』(同 2,23)

以上の二つに記述からいえることは、「名」は、その事物の由来、並びに生成、生起の状況を顕示するものでもある。

2) さらに創世記の記述をみていくと、

「ひとが独りでいるのは良くない。彼にふさわしい助け手を創ろう。主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、ひとのところに連れてきて、彼がそれぞれをどのように呼ぶかをみておられた。ひとが呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった。ひとはあらゆる家畜、空の鳥、野のすべての獣に名を付けたが、ひとにふさわしい助け手は見つからなかった。」(同 2,19～21)

この個所で、「名」を付けることは、その事物を掌握すること、支配することを意味している。

東洋でも、古来からある人間を自分の臣下、家来とするときは、自己の「名」の一字を授けることは多々みられたことである。

また、「名」の変更ということからいえば、

「あなたは、もはやアブラムではなく、アブラハムと名乗りなさい。あなたを多く民族の父とするからである。(中略)わたしはあなたから多くの民族を起こす。」(同 17,4b～6a)

並びに、

「あなたの妻サライは、名をサライではなく、サラと呼びなさい。(中略)わたしは彼女を祝福する。彼女は、諸々の民族の母となり、諸々の民の王は彼女からおこる。」(同 17,15b～16)

アブラハムは文中にも記されているように諸民族、諸国民の父の謂いである。サラは女王の義を持つという学者もいる。いづれにしろ、この個所は、アブラハムの将来の有様、役務、はたらきを前触れ予兆するものである。そして、俱に神の下にあるアブラハムとその妻サラを明示している。

そして、サラの「名」の変更の指示の後、イサクの誕生が告知される。

「あなたの妻サラが、あなたとの間に男の子を産む。その子をイサク(笑うという義)と名づけなさい。わたしは永遠の契約として、彼と契約を立てる。」(同 17,19b.c)

命名者が親ではなく主なる神であり、神による掌握、そして、アブラハムを「父」、サラを「母」とする人々の命名者への服従を示すものといえる。

## 2. 萬葉集

万葉集劈頭にある雄略天皇の歌、

「籠(こ)もよ み籠持ち 掘(ふ)串もよ み掘(ふ)串持ち  
 この丘に 菜摘ます児 家聞かな 名告(の)らさね  
 そらみつ 大和の国は おしなべて われこそ居(お)れ  
 しきなべて われこそ座(ま)せ  
 われこそは 告(の)らめ 家をも名をも (巻一の一)」

同じく萬葉集卷十二の問答歌

「紫は 灰さすものぞ 海石榴市(つばきち)の  
 八十(やそ)の衢(ちまた)に 逢へる子や誰れ」

対して、

「たらちねの母が 呼ぶ名を 申さめど  
 道行く人を 誰れと知りてか」

ここにみられるように「名」を問うということは求婚を意味し、「名」を応えるということはその承諾を指す。

上掲の引用作品から窺われるように、「名」の認知は、繫累化を指し示し、帰属に連鎖する。

以上みてきたように、洋の東西を問わず、通底するものが「名」には存在する。畢竟、「名」は、経験的現実世界に現象する存在、具体的個体、事象事物の真相、もしくは固有の在り方、また本来の真の在り方を提示すると言うことができよう。

即ち、「名」というものは、原語の具備する意味指示作用に基づき、意味表象、即ち意味限定するものであることは、あらゆる場合避けられないことである。

## ・現実経験世界の事象事物を超える存在に対する「名」

### 1. 旧約・出エジプトの記述

モーゼより前には神に関して定まった呼称は存在せず、創世記31章には、「イサクの畏れ敬う方(31,42・53)」という言葉表がみられる。この「名」は、初めてモーゼに明示されたことは誰もが知るところである。彼らの「父」アブラハムも明かされなかったその「名」をモーゼは問うた。

「わたしは、今、イスラエルの人々のところへ参ります。彼らに、『あなたたちの先祖の神が、わたしを、ここに遣わされたのです』と言えば、彼らは、『その名は一体誰か』と問うに違いありません。彼らに何と答えるべきでしょうか。」(註1)

神はモーゼに、『わたしはある。わたしはあるという者だ。』(註2)と言われ、また『イスラエルの人にこういうが良い。《わたしはある》という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだと。神は、更につづけてモーゼに命じられた。『イスラエルの人々にこう言うがよい。あなたたちの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主がわたしをあなたたちのもとに遣わされた。』

これこそ、とこしえにわたしの名

これこそ、世々にわたしの呼び名。(出エジプト 3,13~15)」

ここには、一人称単数で、「ある」が用いられている。この言辞は、モーゼの問いを、

逸らし韜晦するものではない。寧ろ、自己表出の積極面を見るべきである。すすんで自己の实在を表明した言辞と受け取ることができる。

## 2. 旧約・士師記の記述

士師記に、「不妊の妻」を持つダン族のマノアという男に、主の御使いがその妻の男子誕生を予告する逸話がある。

「そこでマノアは主の御使いに、  
『お名前は何とおっしゃいますか？  
お言葉の通りになりましたなら、  
あなたをおもてなししたいのです。』  
と言った。主の御使いは、  
『なぜ私の名を尋ねるのか。  
それは《不思議》と言う。』と答えた。(士師記 13,17～18)」  
ここには「名」で固定し、「本質」で縛り、限界を示す言辞はない。

## 3. 親鸞のいう「名号」

正信偈のなかで善導を讃える句において、「光明・名号顕因縁」と親鸞は記している。親鸞の師法然が深く據った善導の唱えた「称名正定業」を、その書で学び、法然に師事した親鸞自身も、「凡夫」が「浄土」に生きるために「称名」があると考えた。否、唯円が遣したと伝えられる「歎異抄」と併せ考えると、親鸞自身も、観無量寿経が記す「下品下生」の救済こそが「仏」の「正意」であると感得した。

「此人苦逼、不違念仏。善友告言、  
汝若不能念者、応称無量寿仏  
如是至心 令声不絶 具足十念  
称南無阿彌陀仏 称仏名故  
於念念中、除八十億劫、  
生死之罪、命終之時、見金蓮華、  
猶如日輪、住其人前。」(註3)

観無量寿経のこの個所では、「無量寿仏」、「阿彌陀仏」と「称名」している。「無量寿仏」、別名「阿彌陀仏」である。「阿彌陀」は原語で「アミタ」であり、この意は「果てしないもの」「限りないもの」「尽きないもの」である。即ち、「無限」、「無量」。限定を許さないものの意である。「称名」、即ち「名」を唱える、「名」を呼ぶことは、「名」にすぎることであり、「名」に據り頼むことであり、帰依することである。そして「祈る」ことでもある。(註4)

## と 言 の 葉

### 1. 新約・ヨハネ文書

ヨハネの福音書には、「わたしはある」という言表が、八章に三回、十三章に一回みら

れる。

「『わたしはある』ということを信じないならば、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる。」(ヨハネ 8,24b)

「あなたたちは、人の子を上げた時に初めて、『わたしはある』ということ、わたしが自分勝手に何もせず、ただ父に教えられたとおりに話していることが分かるだろう。」(ヨハネ 8,28)

「はっきり言うておく。アブラハムが生まれる前から、『わたしはある』。」(ヨハネ 8,58)

「事が起こる前に、今、言うておく。事が起こったとき、『わたしはある』ということ、あなた方が信じるようになるためである。」(ヨハネ 13,19)

原文には、すべて「 $\epsilon\iota\mu\iota$ 」が用いられている。そこには限定化、特定化される言辞は皆無である。「アブラハムが生まれる前から」という字句も、時間的な限定をあらわすものではなく、時間的な指定を拒否するものである。逆に、時間的な束縛を離れた言表であり、絶えず「ある」ことを示している。即ち、時間を超越した形で、「ある」ことを明示している。

## 2. 旧約文書

創世記の劈頭に記されている「天地創造」逸話の1,1には「初めに」という字句があるが、この字句も、時間的な始源を現すものではなく、時間的制約を超越する言辞である。

また、『混沌』という文言が記されているが、「混沌」という文言が示すものは、雑多なものが混然と秩序なく存在している状態を示すものではなく、「無」の境位をあらわすものと理解しなければならない。

次に、見られるのは、

「神は言われた。『光あれ。』こうして、光があった。良しとされた (1,3~4)」

「神は言われた。『水の中に大空あれ。水と水を分けよ。』神は大空を創り、大空の下と大空の上に水を分けさせられた。そのようになった。(1,7)」

「神は言われた。『天の下の水はひとつところに集まれ。乾いたところが現れよ。』そのようになった。(中略)神はこれを見て良しとされた。(1,9,10b)」

「神は言われた。『地は草を芽生えさせよ。』 (中略) そのようになった。(中略) 神はこれを見て良しとされた。(1,11,12b)」

「神は言われた。『天の大空に光るものがあって、昼と夜を分け、季節のしるし、日や年のしるしとなれ。天の大空に光るものがあって、地を照らせ。』そのようになった。(中略) 神はこれを見て良しとされた。(1,14,15b,18b)」

以下引用は省略するが、ここに上げた言辞だけでもひとつの定式があることが分かる。即ち、「神の言葉」に引き続き「事象」があらわれる。「神の言葉」と同時に「存在」が喚起される。言葉によって「名」づけられることによって、「無」が、事象事物に切り分けられ、特殊化され、分別される。「名」づけられ、喚起された「存在」は、その事象事物だけにしかない、他者には決してみられない唯一無二性と、絶対に繰り返すことのできない一回性で現象する。少なくとも人間の意識にとって、「名」づけという言語行為に

よる意味指示作用によって、「存在」を喚起、現成することができる。

### 3. 「存在」による「実在」

「存在」が、人間の認識意識において、「存在」を切り分け「実在」させていくありかたを見てきたが、人間の言語が、「存在」に向かう時は、いかなる呼称になるか考えていきたい。

旧訳諸文書においては、「わたしはある」という「名」さえ、出エジプト後、口にすることさえ憚れるようになる。出エジプト十章七節、申命記五章十一節にて、「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない」と、記述されている。

また、ユダヤ人が侵入したパレスティナの地には、バアルの神があった。バアルの神は土地と密着した支配、所有と連関していた。日本においても、古代から神（カミ）は、「比喩的にではなく、直接に『領有者』、『領有支配するもの』という意味を持つ言葉(註)」であり、即ち「土地にはそれぞれその土地を領有するカミがいる。だから、土地を占有して建築物を建てるときには、現代でも地鎮祭をする。それは、物を供えて、その土地の領有者であるカミの許可を乞うことである。」(註5)

パレスティナの先住民が崇めるバアルの場合も似たものがあつた。

「その日が来ればと

主は言われる。

あなたはわたしを、『わが夫』と呼び

もはやバアルとは呼ばない。

わたしはどのバアルの名をも

彼女の口から取り除く。

もはや、その名が唱えられることはない。

その日には、わたしは彼らのために

野の獣、空の鳥、土を這うもの時計役を結ぶ。

弓も剣も戦いもこの土地から絶ち

彼らを安らかに憩わせる。

わたしは、あなたととしえの契りを結ぶ。

わたしは、あなたと契りを結び

正義と公平を与え、慈しみを憐れむ。

わたしはあなたとまことの契りを結ぶ。

あなたは主を知るようになる。」(註6)

「彼女」という字句で呼ばれているのは、ユダヤ民族のことである。

「あなたたちの神、主は神々のなかの神、主なるもののなかの主、偉大にして勇ましく畏るべき神、人を偏り見ず、賄賂を取ることをせず、孤児と寡婦の権利を守り、寄留者を愛して、食物と衣服を与えられる。寄留者を愛しなさい。あなたたちもエジプトの国で寄留者であつた。あなたの神、主を畏れ、主に仕え、主に付き従ってその御名によって誓いなさい。この方こそ、あなたの賛美、あなたの神であり、あなたの目撃したこれらの大いなる畏るべきことを、あなた

のために行われた方である。」(註7)

以上みてきたように、神秘に充ち時空を超えた唯一絶対な実在に対して、人間が口にすることの恐れおおさと、在来の土地を支配するバアルの神ではないことを明らかにするために、「主(アドナイ)」と呼ぶようになった。神聖四文字といわれる「YHWH」は発音することなく、「主(アドナイ)」と言い換えるようになった。それは、創世記九章のノアの逸話のなかに、既に、「主」という呼称が現れてくる。ノアの息子セムに関して、「セムの神、主を讃えよ」という言表が見られる。また、同じく、創世記の十五章二節にも、「わが神、主よ。わたしに何をくださるというのですか」という言表がある。様々の理由の中でも、神の絶対性、神の超越性、また、「主にわたしは申します。『あなたはわたしの神』と」(註8)、「主なる神よ、どうぞ赦してください。(中略)彼は小さいのです」(註9)、「わたしたちが塵にすぎないことを」(註10)、

「人の生涯は草のよう  
野の花のように咲く。  
風がその上を吹けば、消え失せ、  
生えていたところを知るものもなくなる。」(註11)

このように神の前における人間の卑小さの経験があった。

また、

「わたしはあなたたちの神となる。あなたたちはこうして、わたしがあなたたちの神、主であり、あなたたちをエジプトの重労働のもとから導き出すことを知る。わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに与えると手を挙げて誓った土地にあなたたちを導き入れ、その地をあなたたちの所有として与える。わたしは主である。(出エジプト 6,8)」

「主」自身の「名」乗りとしてこの個所には記されている。

「主(アドナイ)」とともに、「御名」という言表で、「主なる神」を意味指示するようにもなった。

やがて、レビ記24,11に「この男が主の御名を口にしておぼろしくした」と、その逸話が記されてるように、「YHWH」という固有名詞を決して口頭に上らせることはなく、「御名」という文言で、「主なる神」を指示意味し言い換えるようになった。それは、時空に限定されたものではなく、神が近づきたい超越的で神秘に溢れていることを明示していることができる。

そういう意味では、人間の言語行為の中から生まれる呼称は、大乘起信論がいうように

「以一切言説假名實無但隨妄念」(註12)

「仮名」であり、人間の言語行為の限界の中で語彙であることを忘れてはならない。

## おわりに．

「名」が意味指示しているのはそれだけであろうか。創世記の開巻の記述に注目したい。この個所では「言う」と動詞形で用いられているが、新約ヨハネ福音書序の  $\epsilon\kappa\ \tau\eta\varsigma$  と同一である。ヨハネの序では、「言(ことば)」と名詞形で用いられているだけで、同一と考えられる。「主なる神」を「主」ではなく、「名」ではなく、「言(ことば)」と言い換えている。

いかなる言い回しを用いようとも、それは「仮名」であり、インド古代の仏教者や、中国の思想家たちが、「空」とか「無」というしかなかったように、あらゆる「ことば」を超える無名無相の「名」を受けつけない究極であり、人間が恣意的に「名」づけただけであることを肝に銘じなければならない。

### 【註】

- 1．出エジプト記 3,14
- 2．出エジプト記 3,15
- 3．観無量寿經 p78 岩波書店
- 4．Vocabulaire de Théologie Biblique , Les Editions du CERF , , p.830
- 5．大野 晋 「日本人の神」 p．21 新潮社
- 6．ホセア書 2,18～22
- 7．申命記 10,17～21
- 8．詩編 140,7
- 9．アモス書 7,2
- 10．詩編 103,14
- 11．詩編 103,15～16
- 12．両譯對照内容分科大乗起信論 第三章第一節第一項第一目(一) p.9 永田文昌堂 1994